

にては自分の日常と、あちこちに分離してござらん」と云ふ。

そして、そのへん難をうるたんには、どうしても運動の
へ非日常性の質・〉を問題としなければならぬ。そのような
音味で、詩の非日常性の質が問題となる。

そのことが⑧の“大衆との関係”を言うときの、ほくの問題意識である。そこで、ほくの詩や運動のそれを、質をじですものとして、“大衆一に向一詩の共幼者”である読み手へきはどうしても見出さねばならなくなる。(一月25日)

田常と非田常

をかう以外にないが)以下は辻田浩士さんの「大衆小説の
世界と反世界」(現代書館)をもんでいて、傍線をひいた部
分の一節である。(実は何日もかってあくびので線をひいたり、ひがなかつた
り、殆どひがなかつたり)が、この著者の内容は、前へ未踏といふか、
誰もが論及していない領域を、新しいオリジナルとしか云ひようない視
点からとりあげて、構造を考察しまつていて、線をひき、せば、全部ひる
ばならぬほど、一節一節がことばの宝庫だつた。ぼくがない限りない部分の、別のひろがり
じたことの意味も、一どよんでほしいと思ふ。

▼ 見る意味でも、一どよんでほしいと思ふ。

▼ 創期的に新しい表現が支配権を獲得するためには、それ
を自己のものとして受け入れる受容者が、かなり普遍的に
存在していなければならぬ。他方また、旧来の方法では
表現しきれないものを表現しうるような、創期的に新しい
方法が生れではじめて、それを受け入れる新しい感性をも
つ受容者も形成されるのである。(p.10)

▼ 読者の参加をさまざまなかたちで実現しようとする試
みは、太東ト説の發展と不可分のもとになった。

とも遠く思ひが定まる所から漠然と見ゆるも「とも空想し
みた出来事とも、ほかならぬ自分自身のしまとこころにか
かわる表現として、読者のこうとに結びつけ、そして読
者の「こころを世の讀者と告びつける。受動的はずがない
かに見え、獨立した個々へでしかなじみぬる受容
者が、そのとき、能動性と共同性を獲得するのだ。²²

⑫ 「既成の運動觀からとび出して、運動
の外側から、改めて運動へと入っていへ
「いわゆる詩的概念のつゝの外にあへ、
かば通俗的？非詩的？世界から、改めてへ詩とは何か？を
創つていく」ということは、「非日常的せ衆から日常的
世界へと見る」。その上でさらに「聞く用いた境界とも
こうべ²³絶の壁を穿つて、改めて、非日常的せ衆へとは
いっていい」ということである。

抑言すれば、日常と非日常の世界の障壁に圓穴を作り
、「一つの世界の往還を自在・自由にする余地をひらくと
いうこと、あるくは、へ・非日常の口をヒくへ・やの非日常
化へといつてもよい。

もちろんこの場合の「へ・化」したへ・日常があることは
人非日常」は、もう当初のままのものでない。そのへ
往還には、やがてへ・日常の革命へ・へ革命の日常へ
意味へとすむものと云はねばならぬ。このへ・日常
へ・へ革命のへ・日常の詩化へ・へ革命のへ・日常へ
うつモリード・Eのへ・へ革命へ・へ革命へ・へ革命へ
ボードが、一應ここらで。最後に一

▼「ぼくの詩や運動が、いまのようなものとして、は
つきり意識化してキタのは、巖窟にじうとから8年前
からだ。だが、この二つは、ぼくの内部で別々にあつて
つながりそうで、何かすきまがあつた。その詩と運動が
こんなにもぴったり、ぼくのなかでもぶようになつたの
は、川詩集をこなしたまにしても、感想をじつぱい、いろ
いろもらつてからである。一々れ状を出さなかつたが
ここで心から、ありがとう、と申上げる。尚、感想集に
無断で、一部の抄出掲載の非礼をあえてしたこと、どう
かお許しを。『感想集が、現代詩の問題
を側面から照しきるという感想もあつた。

かの許しを。『感想集』が、現代詩の問題を側面から照らしてみると、『感想』もあつた。

▼ ……どうすれば、あるいは何によつて、小説の世界が読者の現実世界と拮抗しそれを凌駕しうる世界、現実世界と少なくとも半角が世界となつうよかといづば、…もつば、ら作者の立場から、読者におけるぼす作用といふ面からだけ述べてゐることだけでは、とうてい尽くされるものではない、むしろ、作者によつて魅惑され読得されるだけではない、読者の側の行為、聴せしめられさせしめられ、幻想せしめられるだけではない行為が、そこには存在しうるものではあるまいか。(→ 21頁)

(ぼくはへ自由連合小説一、ちがう、といふことを)をかいた。関連の運動
論としてあとでみ下さる。▼詩集へ保存用30冊を貯めて
残部約五十部となりました。ありがとう! ▼ 2月は10
日頃から、犬山ユキへモジヤツコたち、どうしてゐやうかなアし
▼コスモス×切30日! 詩をかかるば、と思つたが……